

《論文》

ライフセービング専門用語の習得に関する一考察

—大学教育におけるライフセーバー育成への応用の観点から—

立川 和美, 稲垣 裕美, 小粥 智浩, 小峯 力

A study of the Acquisition of Terminology of Lifesaving:

Applied to Lifesaver Training in University Education.

Kazumi TACHIKAWA, Yuumi INAGAKI, Tomohiro OGAI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセービング, 専門用語, ライフセーバー育成, 大学教育

key words: Lifesaving, Terminology, Lifesaver Training, University Education

要旨

本稿は、ライフセービングに用いられる代表的なテクニカルターム習得の実態調査を行い、その結果をライフセーバー育成における方法論に応用することを目指すものである。

具体的には、ライフセーバー養成の現場にある首都圏の大学生（ライフセービング部在籍者）に対し、ライフセービングの術語の知識定着に関する調査と、そうした用語を学んでいく上で感じていることについての自由記述調査を行った。その結果、サーフスイム技術に関する術語の定着率は高い一方、海の知識やレスキュー機材に関する術語は定着率が低いことが明らかになった。さらにライフセービングの用語に関して、学生たちは、一般的な意味と異なることや広い領域にわたる点で難しさを感じているが、用語習得はプロのライフセーバーになるために不可欠であるという強いモチベーションを持っていることが確認された。

今後は、技術的な指導の中で、専門用語の定着を図る工夫や教材の開発が必要だと考えられる。

I. はじめに：ライフセービングに関する先行研究

ライフセービングは一次救命の実践を中心とする歴史ある活動で、国際的にも広く市民権を得ている。ライフセーバーが公務員として活躍するオーストラリアでは、サーフライフセー

ング・オーストラリア (SLSA) とオーストラリア・ロイヤルライフセービング協会 (RLSSA) の2組織が、互いに影響を与えながら活動している^(注1)。国際ライフセービング連盟 (ILS: International Life Saving Federation) には現在、世界130カ国以上が加盟しているが、その日本代表機関である日本ライフセービング協会 (JLA:

Japan Life Saving Association) は、1991年に設立され、現在では12000人以上の有資格者が登録されている。JLAでは、「救命Lifesaving」, 「スポーツSports」, 「教育Education」, 「環境Environment」, 「福祉Welfare」をキーワードとして、「いのち」の尊厳やそれを守るための教育活動が行われており、特に近年、ライフセービングはわが国でもその重要度が認められるようになってきている。またその研究については様々な領域からのアプローチが見られるが、以下では、いくつかの例を見ておきたい。

まず、高橋他(2009)¹⁾や桑井(2008)²⁾などの体力医学やトレーニング理論に関わる研究、そして中塚他(2009)³⁾によるライフセーバーの休息法や、吉田他(2008)⁴⁾による活動中のストレス因子と睡眠といった運動生理学をテーマとする研究が、ライフセービング研究の中心となっていることが挙げられる。また、溺者を早期発見するための走査法の特徴といった専門技術に関する研究や、河西他(2012)⁵⁾のようなスポーツと疾患に関わる研究も見られる^(注2)。

本研究に関連する大学におけるライフセーバー養成やライフセービング教育をテーマとしたものとしては、小峯他(2009)⁶⁾、小粥他(2009)⁷⁾などがある。小峯他(2008)⁸⁾は、体系的なライフセービング教育の必要性とその具体的な方法論について、真栄城他(2011)⁹⁾では、実践的なライフセービング教育プログラムの開発について実践例が取り上げられている。この他、深山他(1999)¹⁰⁾では、溺水事故の発生要因の調査を通して、その防止に向けた対人コミュニケーション能力の重要性を指摘している。

さらに、ライフセービングにおける女性の役割も、重要な課題である。千原他(1997)¹¹⁾では、1995年にはSLSAが組織政策として「サー

フライセービングにおける男女平等」を採択しており、1996年の年間報告書ではメンバー全体の約35%が女性で、総メンバーも増える傾向にあるとされている。しかし、女性のライフセーバーの位置づけやあり方についての研究は稲垣(2009)¹²⁾が見られる程度で、ほとんど進められていないのが現状である。救命の現場やライフセービングの活動自体に性差を認めることは難しいが、言語コミュニケーションには男女差があるのが一般的であり、女性としての資質や特徴がライフセービング活動に生かされる可能性は極めて高いと見るべきだろう。その意味で、女性のライフセーバーに特化した研究も今後は必要になってくると考えられる。

以上のように、現在行われている研究は、医学や運動生理学、運動力学の領域が大部分を占め、ライフセービング活動におけるコミュニケーションや、ライフセービングに用いられる言葉を取り扱ったものは極めて限られている。しかし、コミュニケーションはライフセービング活動中の重要な要素の一つであり、またライフセーバー養成の課程においても、言語能力の向上は不可欠である。本稿はそうした点に着目し、以下、ライフセービングと教育、さらにライフセービングの用語について考察を進めていく。

II. 目的

1. ライフセービングと教育に関する見解と実践例

まず、学校における生命教育としてのライフセービングについてだが、ライフセービング活動は、様々なスポーツ活動の前提となる安全教育という側面を持っている。また、千原他(2002)¹³⁾

では、サーフライフセービング・オーストラリアにおける「子供のライフセービングプログラム」の教育効果が、体育・知育・徳育の全ての方向に及ぶことを明らかにしている。このように、学校現場でのライフセービング教育は救命技術の習得に加えて生命の尊厳の理解にもつながることから、今後は積極的に拡充していくべきものといえる。

次に、ライフセーバー育成のための教育活動について考えたい。小峯他(2008)¹⁴⁾では、体育・スポーツ系大学におけるLifesaving教育の体系化というテーマで、安全を確保したり事故を未然に防止したりするための積極的な活動であるLifesaving教育を普及させる重要性と^(注3)、ライフセーバーが地域の人とふれあうことの大切さが指摘されている。ここから、ライフセーバーとしての望ましいコミュニケーションとはどのようなものか、また、レスキュー現場で必要とされるコミュニケーション技術にはどのようなものがあるのかといった課題に取り組むことは、ライフセーバー育成の重要事項ということができよう。この他、真栄城他(2011)¹⁵⁾では、大学教育におけるライフセービングの教育プログラム開発と実践をテーマとし、琉球大学生涯健康教育コースにおける「社会体育指導実習」授業の報告を行っている。この授業では、「生涯スポーツの現場でその職場の責務と役割を理解した上でその対象者とのコミュニケーションを通して、将来指導者となるための体験を積み、その基礎的能力と資質を培うこと」を目標とし、シュノーケリングスキルやライフセービング教育の知識と技術の習得、附属小学校での学習支援が行われている。さらに、プログラム受講生に、「知識の熟知度」や「実践の自信度」、「海を活用した教育活動の重要性」な

どに関する調査を行い、ライフセービング教育において「リスクマネジメント」や「水辺での救助活動」の知識を習得することが、事故防止への大きな効果につながるという結論を得ている^(注4)。

以上、本節では、大学におけるライフセーバー養成教育の実践例等を見てきたが、ライフセーバーは、高度の専門的知識や技能に加えて命を守る者としての基礎能力（セルフコントロール力、コミュニケーション力など）も不可欠であることから、そうした教育の充実と方法の整備が急務であることが明らかになった。

2. ライフセービングの用語

言語学の領域では、スポーツの言語に関する研究はほとんど行われていない。前述の通り、スポーツ科学の主たるテーマは運動力学や運動生理学であり、心理学や社会学との学際的な研究は近年見られるようになってきたが、スポーツの用語や、スポーツに関わる言語現象の研究は非常に少ない。清水(2006)¹⁶⁾が、「用語やスポーツ実況中継、スポーツ時の言語活動」を扱う「スポーツ言語学」のような「言語学とスポーツ学、社会学の分野とにまたがる学際的研究」の発展を求めているように^(注5)、今後は、スポーツ科学研究者と日本語学研究者とが共同して、スポーツ言語の解明に向けた努力を続けていくことが必要である。そこで以下では、ライフセービングの専門用語について、日本ライフセービング協会編(2008)¹⁷⁾を参考に、その特徴をまとめておきたい。

まず、ウエーディングやドルフィンスルー(ダイビング)等のサーフスイム技術、バニーホップやパドリング等のボード技術の専門用語は全て英語であり、波越え操作(スーブ越え)の説

明でも、「スープ（波が立ち崩れ始めたら）ボードのノーズ（先方）を波に対して垂直方向に向ける。ストロークパドルの場合、ボードのレール（横面）を持って上体を起こし、自分の身体とボードの間にスープを通すようにして波の抵抗を少なくするとよい。また、ニーリングパドルの場合、スープを越える直前に上体を起こし、スープを越えると同時にパドルリングしながらバランスをとるとよい」（日本ライフセービング協会編 2008より。以下同）とあるように、一般的な日本語のテキストに比べて多くの英語表現のカタカナ表記が含まれている。またレスキュー器材では、IRBやRWCなどの略語も認められる。

海用語には自然現象に関するものが多く、「陸風（off shore）」のように日本語訳と英語表記が併記され、「水面付近は沖に向かって流れるアップウエアリング（吹送流）を引き起こす。沖からのうねりが大きいとダンパー（dumper）と呼ばれる波を誘発させる」と高度な専門用語を用いて説明されている。更に、波については、崩れ波（spilling wave）や巻き波（plunging wave）、砕け寄せ波（surging wave）や引き波（back wash）等、海流については、離岸流（rip current）、沿岸流（longshore current）、逆潜流（under tow）といった細かな種類が提示され、ライフセーバーが習得すべき専門用語は非常に多い。

以上から、ライフセービングの専門用語は、ライフセービングに無縁の人にとっては聞いたこともなく、英語圏においても普段使用することのない用語で構成されていることが特徴だといえよう。一般的に、スポーツ用語には英語由来の外来語が多いが、特にライフセービングについては、オーストラリアで発達して世界に広がったという経緯から、専門用語は全て英語で

ある。

日本人ライフセーバーの育成においては、こうした専門用語の習得は必須事項であると同時に、馴染みが薄い英語表現ばかりであるため、その習得は必ずしも容易ではないことが予想される。そこで次章では、ライフセーバー育成の課程にある大学生を対象に、こうした専門用語習得の実態について調査を行いたい。

Ⅲ. 方法：ライフセービング専門用語習得の実際—学生に対するアンケートの実施—

今回、ライフセーバーを目指し、その養成課程にある学生を対象として、ライフセービングの専門用語の習得がどの程度達成しているかを調査するため、以下のようなアンケートを行った。対象学生は、流通経済大学ライフセービング部に所属する学生64名（2年生以上42名、1年生22名）、（男子52名、女子12名）で、2011年6月から2014年6月にかけて実施した。アンケートの内容は以下の通りである。

以下のそれぞれの言葉について、「知っている」、「聞いたことがあるが意味はあいまいである」、「知らない」の中のあてはまるものに丸をつけてください。

言葉群：A ウェーディング・B サイドカレント・C アフォリズム・D ダンパー・E パドルリング・F メタファー・G ライフスレッド・H バニーホップ・I チューブ・J トウ・K シラブル・L ドルフィンスルー・M オンショア・N IRB・O IMF・P ヘッドキャリー・Q アンダートゥ・R リングブイ

これに加え、彼らがライフセービング専門用語の習得に関してどのような課題や問題意識を抱えているか（「ライフセービングの専門用語を勉強していく上で感じていることを自由に記してください」）を調査した。こちらの対象学生は、流通経済大学ライフセービング部に所属する学生72名（2年生以上44名，1年生28名），（男子56名，女子16名）で，2011年6月から2014年6月にかけて実施した。次章では，これらの調査結果と，そこから明らかになったライフセービング専門用語の習得に関する実態と課題について考察を行いたい。

IV. 結果と考察

本章では，前節で紹介したアンケートの結果をもとに，そこから読み取れるライフセービングの専門用語の習得に関する実際をまとめていきたい。

ライフセービングの用語習得の達成度に関する質問では，18個の語について，その意味を知っているかを3件法で調べた。前章に示した中でライフセービングに関する言葉は，A, B, D, E, G, H, I, J, L, M, N, P, Q, Rの14項目であり，それ以外のダミーは言語学や経済学の言葉である。以下では，今回の調査目標となるライフセービング専門用語にフォーカスして議論を進めていく。

それぞれの言葉について「知っている = 3点」，「聞いたことがあるが意味はあいまいである = 2点」，「知らない = 1点」として，学生の得点を集計すると，以下のようになった。

1年生（22名）（全体の平均値2.2点）

A ウェーディング = 2.7

B サイドカレント = 1.9

D ダンパー = 1.5

E パドリング = 2.7

G ライフスレッド = 1.1

H バニーホップ = 1.7

I チューブ = 3.0

J トウ = 2.8

L ドルフィンスルー = 3.0

M オンショア = 2.5

N IRB = 1.7

P ヘッドキャリー = 2.3

Q アンダートゥ = 1.6

R リングブイ = 2.4

2年生以上（42名）（全体の平均値 = 2.7点）

A ウェーディング = 3.0

B サイドカレント = 3.0

D ダンパー = 3.0

E パドリング = 3.0

G ライフスレッド = 1.9

H バニーホップ = 3.0

I チューブ = 3.0

J トウ = 3.0

L ドルフィンスルー = 3.0

M オンショア = 3.0

N IRB = 3.0

P ヘッドキャリー = 2.8

Q アンダートゥ = 1.5

R リングブイ = 2.3

1年生と2年生以上のデータを比べると，全体の平均値は，1年生が2.2点であったのに対して2年生以上は2.7点と差が見られ，また2年生以上に関しては，今回の質問に登場したすべての用語をかなり習得していることが明らか

になった。一方、1年生は、Aウエーディング、Eパドリング、Jトウ、Lドルフィンスルーについては90%以上が理解していたが、それ以外の語は未習得の状況にあった。さらに、Gライフスレッド、Dダンパー、Hバニーホップ、NIRB、Qアンダートゥは、1.1~1.7点と極端に数値が低かった。1年生の習得率が高い語は、いずれもレスキュー活動におけるサーフスイム技術やボード技術など、平素のトレーニングに直接関係しているという特徴が見られる。反面、低いグループには、海の知識やレスキュー機材に関連するものが比較的多い。但し、ボード操作の用語であるEパドリングが高い習得率となっているにもかかわらず、Hバニーホップは理解されていないなど、同じ領域の語でもばらつきが見られることに注意したい。

この他、Gライフスレッド、Qアンダートゥ、Rリングブイは、1年生も2年生以上もほとんど同様の低い習得度にとどまっている。これらはいずれも実際のレスキュー活動に関する技法や用具に関する重要語彙であるにもかかわらず、定着度が低いままになっているという実態は、ライフセービング専門用語の学習が体系的に行われていないことが要因ではないかと考えられる。

また今回の調査は、1年生はライフセービングのトレーニングを開始して3カ月程度の集団、2年生以上は既に夏休みなどを利用して海浜におけるライフセービング活動に携わった経験を持つ集団というように、経験差のある集団のデータである。2年生以上の正答率の方が高いことから、1年以上のライフセーバー経験によって、学生たちは専門用語の多くをすでに耳にし、それらの多くがマスターされていることが推測される。しかし、これらが全て正しく理

解されているとは言い切れない。上記の結果のように、まず分野ごとに差が見られること、また比較的得点の高いレスキュー活動の技法や用具の語彙の中にも完全と言えないものがあることは、専門用語習得の上での課題である。

次に、「ライフセービングの専門用語を勉強していく上で感じていること」を自由記述した調査結果をまとめておきたい。まず多くみられたのが、ライフセービングの言葉に対する難しさである（以下、記述はすべて原文のママとする）。

- ・似ているものでも違う呼び方がある。逆に呼び名が近くても全く違うものがある。
- ・ライフセービングはほかのスポーツとは違い、さまざまな視点から多くの知識をとりいれなければならないと感じました。
- ・今まで自分がその言葉を分かっていたも、ライフセービングの専門用語になると意味が違って覚えるのが難しい。
- ・アルファベットが並んだ用語が多いので、混ざらないようにしっかり覚えたい。
- ・今までやったことのない種目だったので、学ぶことの多さに驚いています。

ライフセービングの専門用語が、自分の知っている一般的な意味と異なる意味を持つことに対する驚きや、高等学校までに行っていたスポーツと違って、広い領域にわたる用語習得に戸惑いを感じている記述が目立つ。

さらに、1年生に顕著なのが、

- ・初めて聞く用語ばかりなので、最初に聞いた時は全く分からなかったです。
- ・専門用語が多いため、覚えられるか心配である。

といった不安である。プールやトレーニングの技術練習が始まったばかりの時点で、こうした多くの用語習得の必要性を提示されことに戸惑いを感じている。但し、これと併せて

- ・一つ一つの意味を考えなければ使えないと感じます。
- ・人を救助する際に使うものが多いので、しっかり覚えなくてはいけない。
- ・専門用語はたくさんあると思いますが、できるだけ多くの専門用語を覚える（理解）できるよう努力したい。

のように、これから努力を続けていきたいという積極的な姿勢を示す回答も多かった^(注6)。これは、こうした用語の習得をプロのライフセーバーになるためのステップと考え、チャレンジしていくといったモチベーションの高さを示す結果だといえよう。この背景には、ライフセービング活動が人命救助を行うことと大きく関係していると考えられる。かけがえのない「命」と関わる活動を行うためには、正確な情報の授受が不可避であり、それが尊い命を守ることに直結するというところを、学習者は自覚している。これが、困難な専門用語習得に対する積極的な態度に結び付いているのだと見られる。

さらに、こうした専門用語については、

- ・文字だけを見るとイメージしにくいものばかりである。
- ・一般の人にはわからないカタカナが多い。
- ・動作が分かりやすい用語だなと思う。
- ・サーファー知識も多いので、サーフィンの勉強もするとよいと思っています。

といった言語的性質に関する指摘も見られた。用語の特性を意識しながら覚えていくことが重要であることを、学生たちは直感的に感じ取っているようである。

また、実際にこれらの専門用語を覚える方法については、上級生（2年生以上）から、

- ・体で覚える。頭で勉強するということを意識しなくても自然と頭に入ってくる。
- ・意味と物や道具をなるべく併せて勉強する。
- ・分かりづらいので実際にやりながら覚える。

といった実践を通して知識を増やし、理解していく方法が最も適当だという指摘が見られたことは、興味深い結果といえよう。

V. 結論

ライフセーバーを目指す学生たちは、ライフセービングの専門用語に対して、「初めての言葉ばかりで戸惑う」、「難しい用語がたくさん出てくる」という不安を抱えながらも、「知らない世界を勉強できて楽しい」、「学ぶことによってやりがいが見えてくる」と積極的に捉えているということがわかった。これは、専門用語を覚える上での困難度は決して低くはないが、期待される定着度は必ずしも低いというわけではないことを表している。

前述の通り、ライフセービングの専門用語は普段の生活には全く使用されることのない高度なものも多く、全てが外来語（英語）という特徴から、学生は少なからずその習得に対する負担や不安を感じている。そして、体を動かしながら一つ一つの専門用語を獲得していく学習方法が実践の近道になることを感じている。但

し、今回の結果からは、こうした方法に加えて、用語を整理して理解していく必要性が明らかとなった。専門用語を駆使することはプロのライフセーバーとしての活躍に不可欠であることから、こうした専門用語を体系的にまとめた教材や、実際の技術的な指導の中に専門用語の定着を図るような指導の工夫を行うことが求められる。加えて今後は、性差に関する分析なども進めていく必要がある。

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、私たちは人間の命の尊厳を改めて実感した。被災現場でのライフセーバーの役割は大きく、多くのライフセーバーを養成していくことは急務の課題である。今後は、こうした社会貢献という側面を踏まえ、ライフセーバー育成における言語技術向上の方法論について、具体的に議論を展開していきたい。

本研究は、平成26年度科学研究費助成金を受けた「我が国のライフセーバー育成に向けたコミュニケーション教育の方法開発とその実践」(基盤研究C 26350729)(研究代表者 立川和美)の一部である。

注

- (注1) オーストラリアでは、幼少期からのライフセービング教育も盛んで、そのシステムが構築されており、SLSAの資格としては、サーフライフセービング(13歳以上)、ブロンズメダリオン(15歳以上)、ゴールドメダリオン(18歳以上)が設定されている。
- (注2) 河西他(2012)¹⁸⁾では、選手に対するコンディショニング指導や自己管理教育の必要性や、ライフセービング競技における理学療法士の役割の高さを指摘している。
- (注3) また、海水浴場においては子どもと若者の救助が多いが、小・中学生にレスキューや救命を通じて安全を伝えたり、若者世代にセルフレスキューの知識・技術と、その重要性を伝えたりするLifesaving教育が、事故防止につながることも指摘

されている。

- (注4) 真栄城他(2011)¹⁹⁾のライフセービング教育プログラムは、JLAの講習内容を参考として「リスクマネジメント:危機管理意識の構築」「海の知識:波・流れ・潮汐」「救急法とAED」「応急手当の基本と海の危険生物」「レスキューテクニック」といった内容で構成されている。
- (注5) 数少ない言語学のスポーツ用語研究の一例として、中東(2008)²⁰⁾はテニスの歴史や社会背景との関わり、テニス用語の語源や由来などを議論している。また清水(2006)²¹⁾では、スポーツ社会学会課題研究プロジェクトによる「古館伊知郎のスポーツ実況中継」の考察を例として挙げている。
- (注6) その他、1年生では、ライフセーバーを目指した意欲あふれる回答が多かった。
- ・専門用語を覚えることも大切だけれど、その専門用語を日常使って話すというよりも、何かがあった時、その場の現場でその言葉を分かりやすく伝え、的確に動いて、正しい使い方ができるかのほうが大切だと思います。
 - ・専門用語はちゃんと分かっておくべきだと思っている。自分でわかっていないと相手にも伝えることができなくて、助けるときに困ると思うから。

参考文献一覧

- 1) 高橋正人, 山本利春, 立木幸俊, 河野俊彦: ライフセービングにおけるロード走行とビーチ走行が血中クレアチンキナーゼ(CK)活性値に与える影響の検討. 国際武道大学研究紀要, 24: 93-96, 2009.
- 2) 桑井太陽: 種目特性を踏まえたテーピングテクニック 水泳・水球・ライフセービング. 臨床スポーツ医学, 25 (6): 639-646, 2008.
- 3) 中塚健太郎, 坂入洋右, 荒井宏和, 稲垣裕美, 小峯力: 軽運動が監視時のヴィジランス保持と心理的コンディショニングに与える効果. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1 (2): 97-102, 2009.
- 4) 吉田弘法, 大須泰治, 小峯力, 荒井宏和, 稲垣裕美, 高橋仁: ライフセービング活動中のストレス因子と睡眠. (生活健康, 一般口演・第63回日本体力医学会大会. 体力科学, 57 (6): 843, 2008.
- 5), 18) 川西紀秀, 井口祥平, 神崎智則, 井之側義輝, 高島孝之, 笠原政志: ライフセービング競技会におけるトレーナーセッション活動報告. 日本理学療法学会大会2012予稿集: 1148, 2012.
- 6) 小峯力, 風間隆宏: 海洋教育・スポーツにおける安全管理対策: 津波対策に着目して. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1 (2): 29-38, 2009.
- 7) 小粥智浩, 稲垣裕美, 小峯力: “いのち”のプロジェクトRKU WEEKでの試み. 流通経済大学ス

- ポーツ健康科学部紀要, 1 (2): 39-46, 2009.
- 8), 14) 小峯力, 小粥智浩, 稲垣裕美: 体育・スポーツ系大学におけるLifesaving教育の体系化: 救命・トレーナーの視点からBLSへの試み. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1 (1): 45-53, 2008.
- 9), 15), 19) 真栄城勉, 和田大志: 大学教育におけるライフセービング教育プログラムの開発と実践効果. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 18: 87-112, 2011.
- 10) 深山元良, 小峰直総, 山本利春, 荒井宏和: 海水浴場における溺水事故とライフセービング. 臨床スポーツ医学, 16 (8): 879-885, 1999.
- 11) 千原英之進, 小峯直総, 深山元良: ライフセービングと社会福祉, 学文社, 東京, 1997.
- 12) 稲垣裕美: ライフセービング世界選手権大会に参加して. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1 (2): 129-137, 2009.
- 13) 千原英之進, 小峯力, 深山元良: ライフセービング—歴史と教育, 学文社, 東京, 2002.
- 16), 21) 清水泰生: スポーツのことは今むかし. 日本語学, 25 (14): 18-35, 2006.
- 17) 日本ライフセービング協会編: サーフライフセービング教本, 大修館書店, 東京, 2008.
- 20) 中東靖恵: テニスのことは—スポーツのことはとその背景—, 日本語学, 27 (9): 36-48, 2008.